

幼児教育第二世紀にむかって

——幼児教育の課題——
南 信 子

わが国の幼児教育百年の歴史を省みるとき、そこには、全国各地における幼稚園の創設とそのめざましい発展の歴史があり、また教育と福祉の基本的理念にむかつて、着々と改善充実が行なわれ、その数を増してきた保育所の隆盛には目をみはらせるものがある。家庭や社会においても、次第に一般の人々に、幼児教育の重要性が認識されつつあり、学問的研究の分野に目をむけても、およそ人間を対象とする学問において、乳幼児とその教育は、最も重要な問題として取上げられるに至っていることは、まことに喜ばしいことといわなければならない。

しかし現在わが国はもろろん、世界各国とも、幼児教育について多くの問題に直面している。英国のブラウデンプレポート、アメリカのヘッド・スタート・プロジェクト、ソ連の就学前教育施設の計画的増設と教育内容の改善、アメリカ、ヨーロッパにおけるモンテッソーリ法のリバイバルの波、教育機器による教育、特殊才能開発、生涯教育、早期教育等に見られる諸問題は、幼児教育にかかわるあらゆる課題を包含しており、その内容も複雑である。しかも今や世界的時代であり、民族も個人も、世界をはなれて生きることは不可能である。故に、それぞれの問題を正しくとらえ、適切な方途を見出し、第二世紀は、名実ともに、幼児教育躍進の時代としなければならぬのではないかと思う。

また、ある宗教哲学者が、「世界の歴史は、幼児の歩みとともに進められる」といったが、二十一世紀こそ、幼児、児童の世紀としたい。

また今日の日本の深刻な問題は、教育の混迷にあり、ある人はこれを教育の荒野という。即ち、日本は今や科

学技術の驚異的進歩の中にあるが、科学的、合理的、唯物的な物の考え方の普及は、人間をその内面的な価値の世界と隔絶させ、魂のふるさとを喪失したむなしさを、いよいよ深からしめている。こうした時代に、人間の最初の教育、幼児教育においてまず、そのめざす真の目標を見失うことなく、荒野を泉の湧くところとし、課せられている教育の道に、ひとすじの光を与える尊い役割を果たしたいものである。

このような願いをこめ、第二世紀を歩み始めるために、幼児教育において、今後さらにあきらかにしなければならぬいくつかの問題について考えてみたい。

第一は、幼児教育のプライオリティをどこにおくか、という問題であり、第二は、最近特にめざましい研究成果をあげている発達とは何か、という問題である。これらは成長発達の途上にある幼児理解に欠くことのできない課題であると考えざるを得ない。さらに、幼児教育の中で、幼稚園及び保育所を中心として、教育の中味の問題であるカリキュラムをとりあげ、最後に、古くして常に新しい幼児教育にたずさわる人間の問題にふれてみたいと思う。

一 幼児教育はどこに重点をおくべきか

幼稚園の創設時代には、フレイベルの恩物が、その教育の中心におかれていたようであるが、彼の教育思想はほとんど理解されず、したがって幼児教育の目的や目標よりも、方法として恩物をとりいれ、幼児教育として重点をおくべき目的や内容が必ずしも明らかでなかったようである。その後百年の間には、幼稚園の歴史だけを取り上げて考えても、幼稚園令が制定され、やがて学校教育機関として発達し、保育要領につづいて教育要領が制定され、更に幼稚園教育振興計画、教育改革の基本的施策が打ち出される等、それぞれ多くの論議をまきおこしたが、いずれにせよ多くの人々が、幼児教育に関心を高める結果とはなつたようである。しかし、幼児教育の重点をどこにおくべきかについて、果たして正しい目が開かれたのであろうか。生涯教育の一環としての小学校教育との連関においても、保育所との関係についても、才能教育、早期教育とのかかわりにおいても、幼児教育の

重点をおくべき点が、あきらかでないところから、幼児教育の重要性はむしろ、世の人をまどわす結果となったり、幼児教育を混迷におとしめたり、ゆがめたりする原因となつてゐるのではないかと思う。

幼児教育はどこまでも、人間の人格の基礎をつくる教育であり、人間の一生は、幼児期にきまるといわれる程、その意味は重要なのである。故に、人間が真の人間となるために、また、ひとりひとりが、かけがえのない一人の人格的存在として、与えられているたまものを十分用いて、他の人とともに、世界のために生き、価値ある幸福な人生を創造してゆくことができるように、まず、幼児期に必要な基礎的経験を与えることが、幼児教育の重要な課題であることを、もう一度再確認して、第二世紀を歩み出したいと思う。

こうした幼児教育の最も重要な点があきらかにされるならば、その重点からはずれた幼児教育は一応考えなおさなければならぬことが、自ずと判然とするのではないかと思う。人間形成に重点をおくことは、幼児期だけでなく、人間が一生、人間として生きるために必要な教育であり、そのために必要な基礎的経験とは何かという問題は、結局、人間とは何か、人間とはいかに生くべきものであるか、といった人間の根源的な問題にかかわつてくるのである。これらの基礎的経験に関して、今後さらに研究しなければならない面が多いのではないかと思う。このことに対して確信がなければ、幼児教育はたえず混迷の中におかれるであらう。

二 発達とは何か

幼児は毎日に成長発達しつつある存在である。外面にあらわれる行動によつて、それを知ることができるだけでなく、多くの科学的研究によつて実証される事柄を通して、人間の発達の神秘を示されるのである。最近の幼児の発達に関する研究には、めざましい進歩のあとを見ることができ、目や耳等の機能の発達を始めとして、良心の発達、思考力や感受性、その他諸種の能力の発達の過程を知ることが、大きな驚きというしかない。また、人間の成長発達は量だけでなく質が問題であり、早さだけでなくそこに順序があり、発達する時とそのきっかけには個人差があり、成熟の過程における環境のあり方、刺激等は、重要な意味をもつており、レディネスも

促進させる可能性のあること等、多くの問題が研究によって提起されている。どんなに科学的に究明しても、そこに限度があるように思われるが、たゆみない研究の成果を期待しなければならぬ。成長発達するということを、ブルーナーは、目的追求的な全人格の発達としてとらえなければならないことを指摘しているが、分析的研
究と同時に、全体的に統合して発達を見ることは、特に幼児において必要なことである。幼児の発達に対する理
解なくして幼児教育は考えることができない故に、幼児観と発達観の確立は、幼児教育を促進させる原動力とな
るのである。また発達に関する研究は、幼児教育における適時性の原理、デュイイのいうところの優秀な刺戟の
必要性、環境のあり方等によい方向づけが与えられるが、今後は、さらに現場の実践的研究が期待されるのでは
ないだろうか。

三 カリキュラム

幼児教育、特に幼稚園や保育所における教育では、このカリキュラムの問題は重要な意味をもっている。集団
による教育の中で、どんな経験を、どのように、いつ展開させるのか、これ等を組織だて、系統化し、評価する
ことである。カリキュラムに関する理論と実際を確立させることは、二十一世紀の幼児教育の重要な課題であ
る。カリキュラムほど、世界中の幼児教育において、千差万別の様相を呈しているものは少ない。日本のカリキ
ュラムには、二つの大きな流れがあるように思う。一つは、子どもの日常生活や遊びを重視する傾向であり、他
はむしろ、教師が中心となって計画し、ねらいを定め、環境をととのえ、これを指導する方向である。前者に關
して、幼児の生活は遊びであるという考え方は、昔からあったが、日本語では遊びといえは、とかく非生産的、
娯樂的であつて、教育とかかわりがないように考えられやすいようであるが、この遊びに対する価値を、フレ
ーベルやホイジンガのいうような観点で再認識することが、幼児教育のカリキュラム作成に重要な役割を果たす
のではないかと思う。また後者に関しても、教育要領や保育指針が示す六領域の考え方を、小学校以上の教育の
ような学校化の方向に用いず、幼児教育独自のあり方に弾力性をもって取りいれることが大切であると思う。即

ち、幼児の自由な自発活動を重んじ、物事を自ら学ぶ機会を与えるところの遊びを重視するとともに、教師の計画のもとに展開する教育の内容をできるだけ幼児教育の中で生活化するように、両者を構造化してカリキュラムを作成することが大切であると思う。それぞれの子どもが、力いっぱい生き生きと遊びながら、生活しながら、教師が与えようとする必要なことを、自ら学んで身につけてゆけるような環境をつくってやるのが大切なのである。また集団の中で、個々が画一化、平均化されたり、個性が稀薄化されることがないように、個人差や個性を重んじた教育ができるような方法を発見することが大切である。教師の教えこみの中で、落ちこぼれてしまったり、感動や意欲を失ってしまう子どもがないように、どこまでも、ひとりひとりの子どもがイニシアティブをとる生きた教育のできる方法を、今後追求しなければならないことを痛感する。

四 幼児教育者

幼児教育にたずさわる人の問題は、他のどの教育におけるよりも重要である。何を教えるかということよりも、どんな人が教えたかが最も問題となるのが幼児教育であるといっても過言ではない。幼児教育は、幼児への愛にすべてを捧げる両親や教師によって支えられるものである。カール・メニンジャーは、未成熟な愛情をもつて子どもを愛するのは悪しき教師であるという。未成熟な愛情の持主は、一生懸命愛情の投資をするが、その投資に利子をつけてかえすように要求するからであり、それでは片思いの教師に迫られている不幸な子どもを生むというのである。たしかに幼児を愛することは至難なわざである。このことに対して教師は謙虚でなければならぬし、教師は自ら自己の教育を怠ってはならないと思う。そのような幼児教育者をいかに養成するかはこれまでの二十世紀の大きな課題である。ブーバーは、子どもは世界によって教育されるのであるという。たしかに、子どもは人間の知識や計画をこえたはるかなところで、絶対的永遠的な存在にむかって成長してゆくのであり、自然や社会をふくめた環境全体によって教育されてゆくのであることを忘れてはならない。(北陸学院短期大学)